どえむどうし

白日朝日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
どえむどうし

【Ｎコード】
Ｎ２７５３Ｙ

【作者名】
白日朝日

【あらすじ】
生粋のドＭである主人公がドＳと勘違いされてドＭの女の子に「ご主人様になってください」宣言をされることからはじまる性癖すれ違い恋愛ＳＭコメディです。

第一話「俺の小日向まなみさん」（前書き）

行きあたりばったりで更新してゆくので更新ペースは不定期ですがお付き合いただけるとさいわいです。

第一話「俺の小日向まなみさん」

小日向まなみさんはクールビューティである。
地球開闢以前からそうだったかのように、世界を定義付けるただひとつだけの数式みたいにぶれることがない。
小日向まなみさんは俺の理想の女性である。クラスでも成績優秀文武両道品行方正で中等部生と比較してもやや小さい身長を除けば非の打ち所はまるでなし。その上、クラス委員としてくだす指示も的確で彼女がクラスに与える叱咤は常に俺を鼓舞する。
鼓舞する、というか正確に言うと快感なんだけど、つまり俺はいわゆるところのドMという人種らしい。そう気づいたのはここ数ヶ月の話。
取りあえず小日向まなみさんは俺にとって理想の女王様である。

……そう思っていた。つい五分前まで。
「――大森くんに、訊きたいことがある」
今日の昼休み、まなみさんは冷えた声で俺に話しかけ、その声色に俺はぞくりとした。
今にも「ありがとうございます」と叫びたい気持ちを抑えながら俺は冷静な対処を心がける。引かれてしまっては元も子もない。まなみさん女王様計画（ＭＪＫ）はさながら光源氏のごとく周到に行われなければならないのだ。
「なに？」
精一杯のポーカーフェイス。普段からあまり表情を動かすほうじゃないから得意といえば得意なのだけど、この場面で貫き通すのはなかなか難しい。昼休みの廊下、人通りは多く、有名人の彼女に話しかけられたとあっては注目を浴びずにいられない。よくわからない期待もあるのだけど頬がゆるむことはない。むしろ俺を支配するのは緊張感だ。手先を少し動かすのもなにかを悟られそうで怖いよ

うな、そんな。
　ああ、でも手を動かしたりして今の気持ち読み取られて言葉で責められたらどうなんだ……ご褒美なんじゃないかそれは。御恩と奉公の時代に生まれていたのなら、奉公の結果に罵倒を求めていただろう俺だ。むしろここは少しの可能性にベットして、悦楽園を狙いに行くべきなんじゃないか？
「そうだね。ここじゃあ人が多いから、１０分後でいいから部室棟の前で合流したい」
　まなみさんは告げる。
「わかった」
　俺は簡潔に答える。学校内で女子から呼び出されるイベントなんだから、そりゃあ多少の期待は抱いてしまう。けど、それは表に出せない。
「じゃあ、おねがい」
　彼女も最低限の言葉だけ述べると回れ右をするようにぴしっと踵を返し、廊下の奥へと去っていった。まだ高い日差しが窓辺に少しだけのひだまりをつくる。その光に照らされながらもう一度だけこちらを確認した彼女の横顔が美しくて、俺は動きを止めたまま見とれてしまっていた。
　ああ、マイガッデス。どうか、俺の、最高の女王様になってくれますように……

　そんなことを考えながらたどりついた部室棟前。
　砂埃立つグラウンドの近くにあるため昼休みでも人の姿はあまりない。だからまなみさんを部室棟前に見つけるのは早かった。１０分後と彼女は言っていたけれど、俺と同じくすぐに待ち合わせ場所に向かったらしい。まなみさんは俺の姿を認めるとちいさく手を挙げた。ああ、やっぱり綺麗だな。
　身体に少し貼りついた緊張を引き剥がすよう少しだけ大げさな動きで歩いて彼女の元へ。

「来てくれてありがとう」
「ああ。ところで、話したいことがあるみたいだけど……」
こちらから切り出す。急かすようではあるけれど焦っているつもりはない。ただ、きちんと用件があると把握しているアピール。そういうのを挟むだけで会話の流れはスムーズになると体感で知っている。
「うん……その件だけどね」
はて、と思う。まなみさんのことを比較的多く見てきた自信はあるけど、こういう風に言い淀むことはあっただろうか。いつも簡潔で的確。流鏑馬で的の真ん中に矢を射るような会話をする女の子だと、俺は思っていた。やっぱりこれいわゆる彼氏彼女の告白なんじゃないのかこれおい。
「どうしたの？」
「えっと……。聞いて引いたりしないかなって、すこし不安」
ややうつむき加減の顔を上げ苦笑いするまなみさんの顔には緊張がみえる。とにかく明確にレアな表情。この顔の彼女を好きになったわけじゃないけれど、特別な顔を見るということはけっこうれしい。
「いいよ。たぶん大丈夫」
彼女の言葉を促すことにした。俺とてドMという属性持ちだ。そうそう人の言うことで驚いたり引いたりはしない。
「あの、さ……大森くんは、ばとうって好きな方？」
ややたどたどしく小さな声で質問するまなみさん。その予想外の内容に『罵倒』という変換候補がサジェストされた。いや、まさか。ここは、冷静に。
「えっと。観音？」
「ちがう」首を振る。
「スーホの白い馬」
「馬頭琴でもない」
他に浮かんだ選択肢がすべて消える。

「えっと、他をよくしらないん、だけど……」
俺も動揺がはじまったのか舌がうまく回らなくなってきた。まさか、まなみさんに俺が罵倒されたいことを見抜かれた？　だとしたらどれだけＳの才気に溢れているかという話だ。
「あの、人を罵る方の……罵倒」
ストライク、バッター、アウッ。変な脳内音声が響いた。
質問の意図は分からないけど、まなみさんに俺のＭっ気が見抜かれたことは間違いない。
ならばもうＭＪＫ（まなみさん女王様計画）は一旦情熱の火にくべて可能性にベットする。
「あ。いや、ごめん。この質問、やっぱりおかしい。ごめん、できたら聞かなかったことで……」
赤面し尽くすようなまなみさんの前で、胸は張れないけど、俺も真実を告げることに決めた。
「あの、いや、合ってる。俺は好きだよ。罵倒」
「だから今すぐ罵ってください」という言葉は喉の奥にギリギリで引っ掛けた。
「じゃあ今すぐにのの……」
違う。俺じゃない。この言葉を発したのは俺じゃない。まなみさんだ。
「あー、ちがう。あの、えーと……あの、罵倒好きなんだよね。じゃあ、わたしのごしゅっ……いまのも、ちがう……」
ゴシュってなんだ。しかしさっきから完全に様子がおかしい。照れているような慌てているような、この状態は俺の知る小日向まなみさんでは全くない。
「あーもういいや、えっと、ご主人様になってわたしを罵倒してください！！」
おもいっきり頭を下げられた。えっと、これって、告白？
告白にしても、これ、え……えー……。
「いみが　わからない」

口からエクトプラズム的質問が漏れた。
「だから、いつも大森くんって冷静で眼鏡で、罵倒が好きそうな人間だなって思ってて、それでいいなって、思ってたの。いつか、この人に罵られたいなって。そんな」
言葉につまづきながらも真意をきちんと話してくれる彼女に、押されながら俺は……
「まずは　ともだちから　はじめていいですか？」
なかばオートに無難な言葉を返すこととなった。無感情で。
「……！」
まなみさんが頭を下げたままぞくりと震えていた。なんか正直すこしだけ怖かった。
遠くから鐘の音が響く、ああこれが予鈴だと気づくのにずいぶんと時間がかかった。
「えっと、じゃあ先に教室、行くから」
晴れ晴れとした彼女は、浮かれ気味に去っていった。
その様子を見て普通にご主人様の座に就くより彼女を満足させてしまったのではないかと不安に陥る。
俺の経験則が正しければおそらくその予感は的中で、そして残念ながら……
小日向まなみさんは、俺と同じ、ドM同士である。

第二話「俺の同属嫌悪」（前書き）

前話よりやや短めのお話です。実質的なまなみさん登場シーンが少ない。

第二話「俺の同属嫌悪」

『メールでいいので、なにか罵倒いただけるとありがたいです。』

まなみさんから届いたメールに俺は嘆息する。用件もたいがいアレではあるが、なぜか授業で一度見たことのあるビジネス文書的なノリだ。いや、まあ実際俺が人に頼むとすれば敬語を使うだろうけれど、せめてメールでくらいあのクールビューティでドSだった小日向まなみさんでいてくれれば、もっと世界に対して優しくなれそうだ。とはいえ俺が世界に対して優しくなるより世界が俺に対して厳しくなってくれる方が良い。ああ、その意味でこの状況は俺のM度を試されているのかも知れない……と考えれば色々捗ってきそうなものではあるものの、この目の前の問題をどう片付ければいいのかということには、うーん……。

「だめだ。放置」

ケータイを閉じる。

そもそも昨日学校でメアドの交換まで済ませたのが間違いだった。あれは踏み越えないほうがいい一線だったのだ。まなみさんの誤解をどこかで解かなければとは考えていたけど、結局状況に流されてしまった。

「ケータイ番号と、メルアド教えて」

と彼女は短く命じた。俺は命令口調にすこぶる弱い。理性よりケータイより先に身体が赤外線通信を始めんばかりの勢いで絶頂とともに個人情報流出。挙句、ここで断っておいた方が痛めつけられたりして無理やり聞き出されるんじゃないかという可能性まで真面目に検討してしまった。

その結果が、さっきのメールだ。

頭を抱えるしかない。しかし実はこのポーズをドSな女の子の前でやってみたい。こういう風なガラ空きの背中をどうにかして欲しい瞬間が訪れるのは月に三度や四度のことじゃない。精確に言うと

日に三度から四度だ。
吐き出したため息が近づきつつある夏の熱気に溶かされた。
俺は何に悩んでいるのだろう。冷静さに支配されるほどこの状況の馬鹿馬鹿しさに気づく。俺はまなみさんに目をやった。こちらに気づかず一心で黒板を見つめる姿は、俺の理想であるクールビューティにしか見えなかった。

放課後になる。取り出さないようにしてたケータイを手に取ると、着信を示すランプが灯っている。
当然のように届いていたまなみさんからのメールを開けばそこに文章はなく、サムズアップの絵文字だけが燦然と輝いていた。
首を傾げているところに、また新しいメールが届く。
『放置プレイ、一級品。』
あー……。まなみさん相手にしたくない。
まだ教室にいるかと思って、辺りを見回すと教室の対角あたりに立つ彼女がこちらをうかがっていた。不安げなのかなんなのかよく分からないが結構鋭い目つきでこっちを見ていたので、思わず何らかの興奮度が高まりそうになった。
……そう。まなみさんの性癖がドＭだったとしても、彼女の持つ様々な素養はＳに向いているのだ。だとしたら、俺がやるべきことはなんだろう。
古文ノートの片隅には『別冊　まなみさん女王様計画（ＭＪＫ）』と書いてある。それを取り出して、少しだけ書き換えた。

『まなみさん女王様化計画（ＭＪＫ）』

「よしっ」と軽く俺は気合を入れる。すると着信ランプが灯る。
『痛みをともなう行為も厭いません。』
こちらを見て軽く手を振るまなみさんに、入れた気合が根こそぎ抜けた。

「……ということがあったわけです」
「ふーん。で、直樹ってほかにわたしに言うことはないんだ？」
家に帰ると妹のしずるにこれまでのまなみさんとの経緯を話すとともに言い訳をした。
「二日連続で帰るのが遅かった」
不満気にしずるは言葉をぶつけるけれど、その表情は拗ねているというより蔑んでおりやや心地いい。もっとも蔑む表情というのは俺に対して最も多く見せるものなので比較的慣れているというか、まあやや快感である。
「直樹ってさ、気持ち悪いよね」
「俺は結構気持ちいいよ」
「そーいうんじゃなくね……」
しずるを苛立たせた。ナイス俺。
「帰るのが遅かった理由は話した通り、変なドMの女の子に絡まれてるから逃げ回っているうちにって感じさ。キモいよね、ドM」
「見てればわかる」
「ありがとうございます」
しずるは頭を抱えた。
「ムカつく……」
「蹴っていいよ」
突き出したケツは蹴りとばす足もなく寂しそうに我が家の廊下に佇んだ。
「だから、このクソ兄貴は」
「なんか迷惑かけてるよな。ごめん」
多少は本心が混じった言葉だ。大体四割くらい。
「分かってるならしっかりしてくれると助かるんだけど」
「努力するから御恩くれよ」
「やんないっての」
ほとほとめんどくさそうにしずるは言い放つ。

「放置プレイね。望むとこだよ。ああ、そういや、そのまなみって子は放置プレイもいけるくさかったよ。キモいよね」
「知ってる？　直樹の言うそれ、世間では同属嫌悪って言うんだよ」
知ってる。踏んでくれていいから足嗅がせて。
「あっぶね」
「どうしたの？」
「話の流れに乗って本心を危うく喋りかけそうだった」
こういう言葉、口にしてしまったら家族関係もそろそろやばそうな気がしてくる。
「もういいや、ご飯炊けてるからさっさ食べよう。今日もママ遅い」
「ああ、そう」
しずるに続いてダイニングへと向かう。さっきは話を流しかけてしまったけど、同属嫌悪だって？　そんなことあるはずないじゃないか。本当に俺がまなみさんを嫌悪してるのだとすれば、だって、彼女に対してSのように冷たい態度も取れるということだろう？
「生粋のドMである俺に限ってそれはないよ……」
「変なこと言ってないで、夕飯の支度手伝えバカ！」
妹からしてみればドMでも兄貴でもなくなってしまったらしい。
「ありがとうございます」
それでも罵倒には奉公で返そう。それが犬科の人間である俺の生き方だ。

第三話「俺のかわいい妹」

妹と準備から片づけまでふたりきりの食事を終えると早々に俺は自室に戻った。

やるべきことがあるのだと意気込んで通学カバンから古文ノートを取り出すけれど、もちろん宿題なんて洒落たことをやる気はないし、正直なところ宿題なんて忘れたほうが怒ってもらえるわけで、俺にとって宿題をやる利点がほとんど見当たらない。とは言え宿題忘れをおしかりいただけるのはどうも最初の数週間だけらしくてそれ以来は諦められたのかなにも指摘されない。最近、欲求不満なのはきっとそのせいだ。

……と、なんだか思考がぶれてしまった気がするけど、とりあえず『まなみさん女王様化計画』と書いてある古文ノートをひらいた。

大げさな銘を打ってはあるけれど中身といえば白紙だ。授業内容の記述まで白紙なのは救いがたい部分もあるだろうけど、テストで成績を上げれば赤点程度は回避できる。俺の高校生活なんてのはそれで充分だ。俺を支配してくれるドSを見つけるためだけに三年間を捧げるつもりなのだから。だから俺が今やることはこの白紙をまなみさんで埋めることだ。

しかし、まず何をするべきなのか、のっけから頭を悩ませるところだ。今までサディスティックな女の子と出会うことがあっても、そうでない女の子をサディスティック変化させた覚えはない。

「サディスティック変化……」

気持ちいい響きである。「女の子はみ～んな、サディスティック変化する力を持ってるんだよ♪」とか女の子向け変身アニメでもやってくれればこの国の未来も明るいのではないか、いずれ提言書をつくってみるのもいいかも知れない。

「ためしにちょっと訊いてくるか」

俺は立ち上がり、二階の廊下を挟んで向かい側、妹の部屋へと向

かった。
ノック省略、ドアノブをにぎる。
「うぉほおおい！」
バチってなった。いま、手の骨格が透けて見えた！
咄嗟にノブから手を離すことはできたけど、手が痺れて上手く動かせない。
「これかも知れない……」
なにかを啓きかけた俺がもう一度、ドアノブを握ろうとしたところで、ドアが開く。ドアノブ付近に寄せていた頭がほどよく戸の角にぶつかって、ちゃっかり気持ちいい。
「なにがだ……」
開いたドアの隙間からしずるが睨みつける。
「それだよ！　こういうコンボを俺は待っていたんだ。肉体的な苦痛と精神的な蔑み。理想的な配置だよ！」
俺がテンション上って身ぶりつきでしずるに感動を説くが、一方のしずるは完全なる無表情を決め込んでいる。
「いいから、ちゃんとノックしなさいよ。ノックしたら電流流すのやめるから」
ますますノックする気を失いそうだ。
「どうして、ドアノブにそんな仕掛けを？」
「条件づけで学習させる動物実験にそういうのがあった気がする」
「実の兄に実験動物と同じ扱いするのはよくないですよ」
兄の権威をちょっとだけ守ろうと抵抗してみる。
「じゃあ、うれしくないの？」
「プレジャー！」
「やっぱ、直樹キモイ」
無理でした。
「ところで、何の用で来たの？」
「ああ、サディスティック変化って言葉についてだけど……」
用事を告げると途端にしずるの瞳の温度が氷点下へ。

「超お引き取りください」
「ああ、ごめん！　ぶっていいから待って！」
ドアを閉じようとした妹を、割とかなりみじめな感じで引き止める。
「ええいやめんか。やめんか！」
しずるも擬古文的なダイアローグを用いて俺に抵抗するが、地に伏した状態で胴体を扉の開いた隙間に滑りこませる荒業により、ついに相手が折れた。
「いつからしずるって」
「まず立て」
「はい」
俺は床にへばりついた状態で話しても良かったんだが、その体勢だとしずるは取り合ってくれそうになかった。不本意ながらも立ち上がる。
「本題どうぞ」
「ありがとうございます……こほん」
促されて咳払いをひとつ、それから応える。
「いつからしずるってドSになったんだっけ？」
俺の問いかけに黒目の大きい瞳が意外そうに見開く。
「いや、自覚ないんだけど……」
ないのかよ。天然Sかよ。天然Sってなんだよ。地中にはまだそんな未知の化石燃料が眠ってるのかよ……。
「昔は、お兄ちゃんっ子だったよね」
「今でもそのつもりだけど……」
「そ　う　な　の　か　よ　！」
常に蔑むような視線食らってると相手の好意とか読み取れなくなるもんだな。
「じゃあ、なんでしずるは俺を虐げたがるわけなのか……」
「うれしそうだから」
単純かつ明確な理由だった。なるほど、ある程度の好意があれば

相手に好まれようと、相手の望む行動をするようになるし、相手の色に染まろうと自分の性格だって変えたりしようとする。なんとなくだけど、『まなみさん女王様化計画』の要点が見えた気分だ。
「ありがと。なんか思いがけぬところで目的達成した」
普通に礼を言ったのは久しぶりかもしれない。しずるはなんかすこし照れながら、「さいですか」とだけ返した。
せっかくなのでと、俺はしずるの部屋を去る前にひとつ質問を投げかけてみる。
「じゃあ、お前本当は俺のことどう思ってるの？」
「キモい」
「あふん」
ものっそい冷血な顔で言ってくれた。なるほど、俺はいい妹を持ったのかも知れない。

部屋に戻った俺は、計画ノートの白紙部分に一行だけ今後の目標を記した。
『まなみさんにドMな俺のことを好きと思わせる！』
「よし！」とノートを掲げて、書いたばかりの目標をもう一度読む。

どうもなにひとつ前進した気がしなかった。

第四話「俺のメール送心術」

家に帰宅すると大体メールのチェックを行う。学校ではケータイを使用すると没収されるので規則に従っている形だ。

まなみさんのご主人様指名宣言から数日、主としてメールの内容に頭を悩まされていた。

悩むというのはよくない。Mとして処理に困る状態異常なのだ。しかし彼女にとってそんな事情はお構いなしで、まなみさんから「罵ってくれ」というメールが来て、無視をすれば放置プレイと喜ぶ先日と同じコンボが待ち構えているし、「ごめん。無理」と返せば「焦らしも気持ちいいんですよね！」と顔文字つきでメールが返ってくる。その上、要望通りおっかなびっくり罵る言葉を書いて送れば彼女の望みどおりで「ありがとうございます！」という状況だ。

自分の身になって初めて分かることだけど、Mの人の相手ってほんと面倒くさい。考えうる選択肢では彼女はどれでも満足しているように見える。太刀打ちが難しい。このままでは俺がSであるという誤解が解けないままだし、正直あまりよくない状態なのだけど……。

そんなことを考えながらベッドに鞄を投げ出し携帯をひらいてみる。

「今日は、来てないか」

安心したような、すこし心の準備をしていた分肩透かしだったような気分。放課後になっても彼女からメールが来ないことはここ最近では初めてだ。

「まあ、なにか事情があるのだろう」

ひとりごちながらケータイを閉じる。パタンと閉じるのは折りたたみのガラケーらしい小気味の良い響きを感じられて好きだ。スマートフォンを持たない理由の一つ。

ケータイを閉じてみてふむん、とひとつ考える。

敵を知り痛みを知れば百戦あまねく気持ちいいともいう。ケータイを使ってこちらからまなみさんにコンタクトをとることは今までなかったのだが、まなみさんを理解するためにケータイを使うというのは良いかも知れない。

閉じたばかりのケータイを勢いよく開く。メニューからメールを選択して起動する。

『題：罵ってください』

うむ。

頷いた頭を自分で殴る。違う、そうじゃないんだ。それで合ってるけどそうじゃない。

ここに来てまなみさんの気持ちを理解した。メール送ろうとしたら大体罵って欲しくなる。文字を使って相手に返答を求めるこのメール機能という構造の問題なのだろうか、それとも俺の性癖の問題でした。（リアルタイム理解）

『題：まなみさんのこと、おしえて』

打ってみてわかる、この気持ち悪さである。こんなタイトルのメールが来たらちょっぴり人生をアンドゥしたくなってしまう。

頭をひねってみる。そもそも家族と交わすメールですら事務的なものばかりで大体は題なんて無題かＲｅ：の重ねがけだ。とはいえ一応なりにもガールのフレンドを相手に無題というのも失礼かなとはおもう。ふつうなら好意的な印象は与えられないだろうとは思うけど、相手は特殊なガールである。そもそもよく考えたらそのガールからのメールを返さないことのほうが多い俺は既に失礼さが高まっている。

『題：自己紹介』

うん。これならいけるかも知れない。相手から情報を引き出すときはまず自分の素性からというのは、社交界の鉄則である。その界隈がどこにあるのかは知らないけれど、自己紹介すればその後の会話が円滑になりやすいというのは経験則でわかることだ。

さて、本文を打ち込もう。

『本文：思うさま罵ってください。』
思いの丈が募った。
うむ。そうじゃないな。わかってはいるんだ。消去する。
『本文：おたがいのことについて
もうすこし知っておいた方がいいかも。
うっとうしいかもだけど
さきに俺のこと書いておくね。
まず、名前と経歴は省略。俺
のあだ名ナオキ・インティライミ。太陽
の祭って意味らしいよ。インティライミ
しらないけど、芸能人の名前とかか
ってるんだって。好きなものは
てぶくろの閉塞感みたいなやつ。
くらいとこにいるのも結構好き。
だめなところもいっぱいあるけど、
さすがにここでは書きづらいかな。
いもうとが一人いるよ。（どうでもいいか）

よかったら、まなみさんのことも知りたい。』
うん。なんか拙いけど、その方が真意が伝わるかなって思う。ところどころ変な趣味は書いてるけど、その辺りはスルーされるだろう。彼女でもない人間にこういうメールを送るなんてけっこう恥ずかしい。変なリアクションされたら嫌だなとは思うけど、普段から変なリアクションしか返って来てないのでどっちもどっちという感じだ。
そんなことを考えるうちに気が軽くなってきて、俺はメール送信のボタンを押した。
行ってこい。そして、相手の情報を引っ張ってこい。
『送信しました』の文字を確認して、ケータイをパタンと閉じる。
「ふぃー」

メール作成から続いていた妙な緊張感がとけて、まだ制服のまま着替えてない自分の装いに気が向く。
三十秒もせずに着替えは終了。女の子はもっと時間がかかるものらしいけれど、男の場合は着たり脱いだりより折りたたんで制服をハンガーに掛けたり折りたたんだりする方が時間を要するくらいだ。
着替えてすぐ着信がないか確認する。あーなんかいまの俺すごく初めてケータイ持った人間っぽい。せわしなくケータイのパタパタを繰り返す。
女の子にメールを送るという行為自体がこんなに落ち着かないものだったとは。
メールに不備あったりしたらどうしよう。言葉で責められたらどうでしょう？
とりあえず、送信したメールの確認をしようともう一度ケータイをひらく。
「あった……不備あった……！」
やった。これで罵ってもらえる。探しものを見つけたような心のこもった声を上げると小さくガッツポーズ。いやいや冷静になれよ俺。
「この不備に関しちゃ気付かれたらむしろマズい」
残念なことに、このメールは本文左端を縦読みすると『おもうさまののしってください』と読めるようになっている。
心の発露ってすごいとこから現れるんだなあと感心した。

けれど、そんなことに感心してる場合じゃなくて、問題はこのメールの不備だけには留まらなかった。
この日一日、普段ならメールを返せばすぐに返事の来るまなみさんから、このメールに対する返答がなかったのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2753y/

どえむどうし

2011年11月21日21時42分発行